

水産研だより

【今回の内容】

- 1 「冷水病に耐性のある性転換雄アユの生産に成功」
- 2 「タイ派遣報告(2度目のニジマス種苗生産の技術指導)」
- 3 「研究発表会を開催しました」



1 「冷水病に耐性のある性転換雄アユの生産に成功」

当研究所では、平成20年度より「子持ちアユ」生産のための性転換雄アユの精液（以下「全雌化精液」）の供給を行ってきました。ここ数年は、年間約1,200mlの精液を県内養魚場に出荷し、県内では250～300tの「子持ちアユ」が出荷されています。

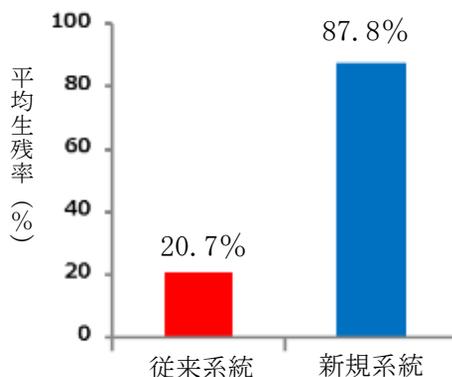
一方で、この性転換雄アユは琵琶湖産系のアユを由来とするため、冷水病に弱く、感染実験における死亡率は約80%となっていました。

そこで、当研究所では、平成26年度から冷水病に耐性のある全雌アユの生産に着手しました。冷水病に感染させた後に生残したものを親魚として用い、毎年これを繰り返すことにより、徐々に耐病性を獲得したアユを選抜しました。

平成29年度に実施した感染実験では、従来系統の約1/4の12%の死亡率に抑えることに成功しました。

平成30年度からは、この系統の全雌化精液を中心として出荷していく予定です。

冷水病実験感染における平均生残率



(資源増殖部 大原)

2 「タイ派遣報告(2度目のニジマス種苗生産の技術指導)」

タイ王国のチェンマイ県漁業研究所から、ドイ・ダム研究所におけるニジマスの種苗生産の2度目の技術指導の依頼があったため、昨年12月11日～16日の日程で原主任専門研究員と大原専門研究員の2名がタイ王国に派遣されました。

昨年5月29日～6月1日の最初の指導（概要は本誌第34号参照）を踏まえ、当研究所のニジマスの種苗生産手法を基に、12月から始まるドイ・ダム研究所での種苗生産に合わせて、現地での指導を行いました。

チェンマイを朝出発し、北北東に直線距離で約150km、ミャンマーの国境まで約3kmという場所にあるドイ・ダム研究所まで、自動車ですべて約5時間かけて移動しました。

同研究所には屋内で種苗生産できる施設がないため、紫外線の影響を受けないよう日の出前の早朝に作業を行っていました。そこで、到着後日没までの間に、種苗生産の際に使用する等張液(体内の液と同等の成分の液体)等を準備するとともに、採卵可能な雌を選別しました。昨年の種苗生産実績を確認したところ、過熟卵(成熟しすぎて受精しない卵)の割合が高いことが判明しました。



また、雌雄を同じ池で飼育し、種苗生産の際に毎回雌雄選別していました。魚は成熟時期に雌雄を同じ池で飼育すると成熟が速く進むため、種苗生産の時期を迎える前に雌雄選別して別々の池で飼育するよう指導しました。その結果、今回の選別の際には、成熟しすぎた卵が少なく、適熟卵の方が多くなりました。

翌朝4時30分から種苗生産を開始しました。「ニジマスの種苗生産手法」を基に、手順を説明し手本を示しながら、Somporn博士や現地のスタッフに同様の手順で行ってもらう形で進めました。途中質問があった場合はその都度説明しました。受精卵を屋内の収容槽に収容した頃には、夜が明けていました。

あらかじめメールで同研究所での「種苗生産の現状と問題点および改善案」とそれに基づく「改善後のニジマスの種苗生産手法」を送付していましたが、実際に現地に赴いて作業全体を通して一緒に行ったことにより理解が深まったという意見をいただいたことから、現地での技術指導の意義を感じました。

(下呂支所 原)

3 「研究発表会を開催しました」

3月7日(水)に中濃総合庁舎(美濃市)で平成29年度の「研究発表会」を開催したところ、県内各地域より漁業関係者をはじめ行政職員、自然工法管理士など144名の方々にご出席いただきました。

研究発表は5課題で、それぞれの担当者から報告しました。

発表内容は、

- 「河川と水田をつなぐ水みちの再生」
- 「長良川におけるアユの放流時期別の費用対効果」
- 「長良川河口堰におけるアユの遡上尾数と潮汐の関係」
- 「アユ早期小型放流の効果について」
- 「岐阜県における溪流魚人工産卵河川の取組」 でした。



発表後の質疑応答では、参加者の方からご質問やご意見をいただき、大変有意義な発表会となりました。誠にありがとうございました。

(漁業研修部 松田)